



開催地名：愛知県豊橋市	
開催日時	令和3年8月7日（土） 15:00～16:30
開催場所	少年自然の家
語り部	鈴木秀光（宮城県気仙沼市）
参加者	防災危機管理課職員 市内高校に通う高校生 計30人
開催経緯	<ul style="list-style-type: none"> ・本市では近年大きな災害が発生していないため、過去の災害が風化されつつある。 ・自主防災組織の高齢化や若年層の防災意識が低下している。 ・小学校や各地域に実施している防災訓練がその場だけのものとなり、定着するまでに至っていない。
内容	<p>(1) 震災の被害状況</p> <p>平成23年3月11日、14時46分頃に三陸沖で発生した地震はマグニチュード9.0という大規模なもので、東北の太平洋側に甚大な被害をもたらした。気仙沼市では震災直後、70センチメートルも地盤が沈下した。また、津波により40隻をこえる大型船が陸上に打ち上げられ、約3,000隻の漁船が流されたり、損壊したりした。そして、向洋高校では4階部分まで浸水の跡があり、およそ16～17メートルの津波が来ていたと推測される。気仙沼市での死者数は1,034人を数え、行方不明者も212人、震災関連死と認定された方も109人にのぼった。この数字は、気仙沼市全体の人口の約1.8%にあたる。被災家屋も15,815棟にのぼり市内全体の約40.9%にのぼった。震災によって、被災した事業所、従業員は全体の8割を超え、震災直前には約74,000人いた人口は、61,376人まで減少している。</p> <p>気仙沼市では、想定されていた浸水区域外である市役所前の道路まで浸水し、瓦礫で埋まり孤立した。庁舎も浸水により停電した。そのため調査や救助にも大きな影響が出た。市内で給油ができるガソリンスタンドは3か所しかなく十分な燃料を配給するにも手間と時間を取られた。ライフラインの復旧は3日ほどで回復すると予想していた。しかし、想定を超える津波被害により電柱が倒壊したり、地面がまるごとはがされて流されたりしてしまった。そのため、停電が市内全体で解消されたのは震災から2か月後、また水道の復旧に関しては3か月後であった。</p> <p>市内の避難所は最大105箇所にとぼり、1日2食の食料を提供した避難者数は20,000人以上に及んだ。大規模な震災被害だったため、コミュニティーセンターや寺院、一般住宅も避難所として機能した。救助物資につい</p>

	<p>ては、震災直後からすぐに市役所から各避難所に配送した。はじめのうちは食料や水などの不安があったが、避難が長期化するにつれてプライバシーを守るためのパーテーションや床に敷くためのマット、着替える場所やシャワー、トイレなどの生活に必要な物品やスペースの確保などの必要性が高くなっていった。また、病気の方のための薬など生命に関わる物資も必要であった。提携先の製薬会社と連携しても、実際に薬が手元に届けられるのはすぐとはいかず、かなりの時間を要してしまった。各避難所では、市役所職員や大人だけでなく生徒、学生が強力な支援者となり、率先して配食の手伝いなどをしてもらい非常に助けられた。</p> <p>(2) 想定される被害と今後の心構え</p> <p>大規模な地震と津波は想定をはるかに超えており、多くの試練をもたらした。豊橋市も今後、南海トラフ地震や東海地震などの大規模な災害に見舞われることが想定される。大事なことは、過去の地震規模のみならず理論上最大限のケースを想定しておくことである。また、その震災が単独で起こるパターンだけでなく、連鎖的に、または時間差的に起こる可能性もあるといえる。豊橋市では、最大 68,215 棟もの建物被害、そして 4,733 人の死者数が想定される。これは豊橋市全人口の約 1.3%にあたる数字であり、気仙沼市での東日本大震災における死者数は、全体の約 1.8%であったためありえない数字ではない。</p> <p>今後も地震や津波など、様々な大災害が起こるということは確実である。そのような地域に住む者として、我々一人ひとりが何をしていくか、どのような準備をしておくべきか、ということは非常に重要なことであると考えている。</p> <div style="display: flex; justify-content: space-around;">   </div>
開催地より	<p>家が被災して避難所に来た人が、食料を取りにきた避難所外避難（家が無事で自宅に避難生活）する人に石を投げつける話は非常に衝撃を受けた。車中泊を含めた避難所外避難への対応について想定、検討する必要があると感じている。</p>